

博士学位論文審査報告書

題目 『依田学海研究－漢文小説を中心に－』

氏名 楊爽

論文審査委員 主査

教授

江藤 茂博

副査

特別招聘教授 稲田 篤信

副査

教授

山口 直孝

副査

教授

町 泉寿郎

論文目次と内容の要旨

本学博士後期課程在籍学生楊爽の学位申請論文は、『依田学海研究－漢文小説を中心に－』として 370pA4 版の装丁で提出された。目次は以下の通りである。

序章	1
第一節 漢字文化圏と漢文小説	
第二節 依田学海の生涯と著述	
第三節 研究史と本論の構成	
第一編 白話体作品の意義	9
第一章 漢文白話体小説の書き手「秋風道人」とは誰か－依田学海の創作活動の一面	
第一節 秋風道人とは－『東京柳巷新史』から出発	
第二節 『花月新誌』における秋風道人－先行研究への疑義	
第三節 『当世新話』と秋風道人	
おわりに	
第二章 依田学海における白話小説の試み－秋風道人「新橋佳話」の写実と寓意－	
第一節 「新橋佳話」の概要	
第二節 「新橋佳話」の表現	
第三節 「新橋佳話」の風刺の意味	
おわりに	
第二編 文言体作品の特色	42

はじめに

第一章 評伝から漢文小説へー依田学海『譚海』にみる『名家略伝』の翻案方法ー

第一節 山崎美成に関する先行研究

第二節 山崎美成の自序文からみる『名家略伝』

第三節 『名家略伝』に取材した諸作品

第四節 「田中丘隅」について

第五節 「風外」と「風外禅師」

第六節 『賣酒郎』をめぐって

おわりに

第二章 依田学海の『蝦夷風俗彙纂』受容ー「蝦夷三孝子二貞婦」の典拠を中心にー

はじめに

第一節 「蝦夷三孝子二貞婦」と『蝦夷風俗彙纂』

第二節 「蝦夷三孝子二貞婦」と「ベロ 龜松」

第三節 「蝦夷三孝子二貞婦」と「アベハナ」

第四節 「蝦夷三孝子二貞婦」と「孝多」

第五節 二貞婦の話について

おわりに

第三章 『譚海』における漢文体「実録物」の受容と変容ー「孝義復讐」を事例として

はじめに

第一節 竹内楊園について

第二節 関連資料から見る『東毛復讐始末』

第三節 『東毛復讐始末』の作品構成について

第四節 『東毛復讐始末』と「孝義復讐」

おわりに

第四章 依田学海の「合伝」方法ー『譚海』にみる『百家琦行』の受容

はじめに

第一節 岳亭五岳と『百家琦行』

第二節 『譚海』にみる『百家琦行』の諸作品

第三節 『譚海』における「合伝」の様相

第四節 「奇僻」にみる学海の「合伝」方法

おわりに

第三編 作品の影響

177

第一章 近代における漢文小説の「還流」－依田学海『譚海』と『東海遺聞』の関係を中心に

はじめに

第一節 先行研究

第二節 先行研究に対する疑問と問題提議

第三節 『東海遺聞』の出典

第四節 『譚海』とその時代

第五節 「天下才子必読・漢文絶妙編」について

おわりに

第二章 依田学海『譚海』の海外への影響をめぐって

－常熟図書館所蔵稿本『海客談瀛録』

はじめに

第一節 徐兆瑋について

第二節 徐兆瑋の日本留学の経験

第三節 徐兆瑋と漢文小説

第四節 『海客談瀛録』の作品出典及び編集状況

おわりに

付論 依田学海と『聊齋志異』－「小野篁」と「蓮花公主」との比較研究を中心に－ 240

はじめに

第一節 「小野篁」と『聊齋志異』との対訳

第二節 「小野篁」と「蓮花公主」との比較

第三節 「小野篁」に対する同時代評

おわりに

終章 284

資料編 「依田学海序文」集 289

主要参考文献 355

初出一覧 370

内容の要旨は以下の通りである。

序章では、漢字文化圏としての近代日本文化、そうした文化のなかでも近代日本文学史においては漢文小説があまり評価されることがなかった状況、そうした漢文小説の書き手である依田学海の生涯が紹介されている。

第一編は、依田学海の白話体漢文小説についての考察である。

第一章では、依田学海が秋風道人の号を使ったことを確認して、成島柳北が主宰する『花月新誌』に掲載されていた「新橋佳話」、「七湯清話」を、学海の白話体漢文作品を新たに特定している。第二章では、「新橋佳話」を取り上げて、時事的な風刺とともに、依田学海の演劇観を読み解く。学海が白話体漢文小説を「手がけていたことの持つ意味は大きい」としている。

第二編は、学海の代表的な作品『譚海』を中心に、文言体漢文小説に関する考察である。

第一章では、『譚海』と底本『名家略伝』とを比較することで、「工夫を凝らし漢文体小説に仕立て上げる学海の記述姿勢」を明らかにした。以下、同様な研究方法で、第二章では、「蝦夷三孝子二貞婦」とその「粉本」から、「作品の史実性・時代性を希薄にし、作品の表現を平易化にしたうえ、人物を本筋としている特色がある」とする。第三章では、学海の「孝義復讐」と典拠である竹内楊園『東毛復讐始末』とを比較し、作品の「文芸性」=フィクション性を指摘している。第四章では、『譚海』と粉本「百家琦行伝」とを比較し、『譚海』では、『史記』の「合伝」という表現方法に拠ったことを指摘し、「近世の評伝作品に新しい可能性を与えた」とする。また、近代以前の漢文小説との差異を指摘しながら、その近代化された漢文小説として依田学海の小説を指摘した。

第三編は、『譚海』を始めとする依田学海作品の外国文表現文化への影響を論じたものである。

第一章では、依田学海の『譚海』と村山自彊の『天下才子必読・漢文絶妙編』が、明治期中国人留学生たちの手によって、中国にもたらされ、さらにリライトされて、『東海遺聞』が成立したことを論証した。第二章では、同じく、中国にもたらされ、リライトされた徐兆瑋の未刊小説集『海客談瀛録』を取り上げ、徐の日記の記述を基に、それが依田学海『譚海』と菊池純『本朝虞初新志』に拠るものが採られていることを、実証的に示した。これらの作品の存在は、「文化還流」とし、「日中文学・文化交流を論じる上で重要な資料」だとする。そして中国における「近代小説の確立期」での、漢文小説の形態が、日本文学との相互関係をもたらしただという事実を指摘した。

付論は、『新著百種』に掲載された依田学海『小野篁』が、その典拠とした中国古典作品『聊齋志異』の「蓮花公主」との異同に着目して、新しい作品として再構成していく学海の「独自」の方法には、近代小説としての評価も与えることができるとした。

結論は、依田学海の翻案という仕事は、その方法や影響から考察しても日本文学の近代化へ貢献した評価すべき漢文小説であると論証されてきた本論を、再度ここで整理されている。

資料編は、他の書き手の書物に「序文」として書かれた依田学海の文章を翻刻し集めたもの 101 篇。地道な努力による資料集となっているが、まだこれを使った研究までは及んでいない。

論文審査結果の要旨

依田学海は、役人の経歴を持ちながら、漢文小説の作家、文芸評論家、漢文教育者として 19 世紀末に活躍する。近代日本の文学が向かった「言文一致」のリアリズム小説への方向は、漢文小説の書き手を求めなくなった。それどころか読者もまたそこに用意しなくなった。なぜなら、教育制度のなかで、漢文教育は中等教育のひとつの教科に位置づけられたからである。そして、近代日本は知識人としての素養を、西欧文化から得ること力が向けられる。そうした時代の教養文化のいわば転換期に生きた依田学海とその仕事は、その後の近・現代日本の表現文化史からは留意されなくなった。博士論文「依田学海研究－漢文小説を中心に」は、従来の文学史的な視座からは評価・位置づけが不十分であった、依田学海の作品を漢文小説とし、その典拠とを関係を中心とした研究である。特に、典拠となった先行作品と依田学海の作品を比較検証することで、学海の創作方法の顕在化と意味づけ、さらに学海作品に対する文学史、日中文化交流史、メディア史における評価・位置づけが試みられている。こうした分析に加えて新たな資料の発掘も含めて、提出された論文は、博士論文として十分な内容を持つものである。

1 論考の構成

本論文の全体は、大きく第一、第二、第三篇と分かれている。「第一編 白話体小説の意義」では、依田学海の執筆活動の幅の広さを実証するとともに、明治 10 年の作「新橋佳話」を取り上げて、その表現方法においては戯曲脚本のそれに近い方法を指摘。「第二編 文語体作品の特色」では、依田学海の表現方法について、具体的な作品を取り上げて検証。「三編 作品の影響」では、東アジア漢字文化圏における『譚海』の海外流布とその影響を、尹蘊清『東海遺聞』と徐兆璋の日記から検証。いずれも、依田学海の漢文小説の方法とその影響について東アジア漢字文化圏のなかで捉えた論であり、その指摘する事柄はいずれも傾聴するに値するものである。さらに「付論」として、今度は逆に、依田学海における

『聊齋志異』受容の問題を取り上げていた。また、付録の「資料」は、「依田学海序文集」として、学海が書いた「序文」を収集翻刻 101 作が集められている。本論文は、対象としては、依田学海の膨大な仕事の中の、特に『譚海』に焦点を置いて、依田学海の創作表現の方法と中国文化との関係とを実証的な方法で明らかにしたものである。

2 論考の特色

本論考の特色は、まず、全体を通しては、依田学海の作品に対する典拠と執筆された作品との関係を実証的にその軌跡を明らかにするという方法を採用したことである。この方法によって、依田学海の創作の表現力学とその構造が言語化されることになったのである。このことは高く評価できる。つまり、従来研究の深化がなかなか進まなかった依田学海及び漢文小説に対して、作品とその出典等との実証的に比較することでの調査分析によって、学海の具体的な創作方法が明らかになり、語句表現を対象とするより具体的な典拠受容と表現の関係がここで明らかになったからである。

また、実証的な調査のなかで、従来は依田学海の著作とされていなかった学海の文章の発見、さらには依田学海の仕事として対象化されてこなかった「序文」の収集を通して、新資料紹介を付したのは、さらに今後の研究に結びつくものとして高く評価したい。

3 論考の視座と分析

第一篇の第二章では、特に、「新橋佳話」を取り上げて、その世相についての批評性、元明の白話文体的表現による漢文小説の表現の可能性追求などの指摘は、かなりの説得力を持つものである。

第二編では、典拠とした評伝『名家略伝』を依田学海がいかに受容し、漢文小説に組み替えていったのかを、①他の「材源」を加えたパターンとして「田中丘隅」「小萬」②「奇」の「部分」を「強調」して「趣向を優先」させたパターンとして「風外」③和製漢語による表現工夫として「売酒郎」と指摘した。こうした細かに指摘された分類は、組み換え主体である依田学海の創作意図を読み取ることができると共に、そこに近代的な作家主体を想定することができるのである。特に第四章では、依田学海『譚海』の材料とした岳亭五岳『百家琦行伝』からの具体的な受容から、『史記』の「合伝」という方法を取り入れたことを実証しながら、そこで使われた文体と共に、学海の近代文化に対する方法的な対処の姿を見るのであった。論者は、近代作家としての面を依田学海に求めようとしているが、この典拠との関係において浮かび上がるのは、まさに近代作家としての依田学海の姿であったと納得できる。

第三篇では、東アジア漢字文化圏という視座から、依田学海の作品の国内外での広がり、新聞広告等のメディア論的分析、中国での出版物への伝播等への書誌的分析により、明らかにしたことを評価したい。ここでは、尹蘊清が『東海遺聞』を出版するにあたり、その底本としたものが、『譚海』と村山自彊編『天下才子必読・漢文絶妙編』の二書だった

ということを実証していく。そして、こうした事例を、「明治期の日本漢文小説の海外への流布状況を示す好例」だと見たのである。また、徐兆瑋の日記の記述を参照しながら、『海客談瀛録』とその出典となった『譚海』の入手経緯、それと出典からの再編状況の検証による、編集意識の顕在化、そしてそれらに見て取れる日中の文化交流を指摘している。そして、そうした現象が生まれた理由として、当時の中国留学生人の目から見た、漢文小説の近代性を論者は指摘している。

4 論考の可能性

こうした『譚海』を中心とした実証的な分析は、依田学海研究の新しい展開と学海作品への新たな評価を生むものであると考えられる。一つには、日中文化交流史における、具体的な「交流」が、この『譚海』が採集した典拠とした中国の作品との関係、逆に『譚海』を典拠とした中国の作品との関係が、その様相を示しているという指摘である。ここから、さらに日中文化交流史の具体的な姿が検証されていくことになると思う。それは、漢文小説というジャンルの特性を照射することにもなる筈だ。さらに二つめとして、漢文小説の近代性を指摘されていることから、これまでの言文一致系小説とは別の枠組みでの近代小説の系譜が構築できるのではないかという可能性を予感させる研究でもある。また、三つめとしては、東アジア漢字文化圏という視座から、依田学海の作品の国内外での広がりや、新聞広告等のメディア論的分析、中国での出版物への伝播等への書誌的分析による論考を実証的に組み立てたことである。ここには、漢字文化圏という文化的な広がりやメディア研究とを結びつけた、あらたな研究領域が提出されている。こうした三つの研究領域の可能性が、この一連の研究からもたらされたものである。

5 おわりに

依田学海研究には、漢文学の知識の必要性が求められることで、近代日本文学研究が用意した原理と結びつきにくく、早くは大正期から現代日本文学の領域から排除されてきた。すでに、日本文学史の概説書からは、近代日本の漢文小説は、その存在すら消されてしまうことがままあったのである。こうした忘れさられようとしている文芸領域を、外部的な視座からとらえ直し、さらには依田学海の書物を通じた日中の文化交流の具体的な場面を提出できたことは、本博士論文の特色であり、論者の力量によるものであり、今後の研究も大いに期待できる。

問題点としては、一、同時代の文学者の仕事との比較が乏しく、論者の訴える学海の独自性が必ずしも説得的に伝わらないところが挙げられる。二、『小野篁』については小金井きみ子『皮一重』と照らし合わされているが、それ以外の章においては同じ手続きが見られない。三、『譚海』については、やはり菊池三溪『本朝虞初新誌』との比較考察などを展開された方が学海文学における異種混合性が一層際立たせることができたと推量される。四、さまざまな創作活動を行った依田学海という文人のなかでの漢文小説が持った意味が

どのようなものであったのかについては、ほとんど言及されていない。これらに関しては今後の考察に期待したい。

上記のような課題はあるものの、学海および近代漢文体小説の位置づけを実証的な手続きで明らかにした本論文が意義深いものであることは確かである。本審査委員会は、本論文が「博士（文学）」（甲）の学位に値するとの結論に達した。